

平成30年度愛知県がんセンター公開講座(第3回)のご案内
「がんゲノム医療の基礎と臨床」
= 平成30年9月1日(土)開催 =

〈 講師からのメッセージ 〉

「総合がんセンターの目指すところ」

今やヒトゲノムの塩基配列は全て解読されており、次世代型の塩基配列解析やゲノム編集等の技術革新と相まって、がん研究の在り方は変革を迫られています。そして、現在のがん医療は、がん研究の発展と密接に関連しており、もはや両者は融合しているといっても過言ではありません。当センターでは本年4月に研究所を全面的に再編し、我が国有数のがんに関わる研究と医療の双方の専門家が集結した comprehensive cancer center (総合がんセンター) として、その果たすべき役割を強く認識しつつ、がんの予防・診断・治療の革新を目指しています。

愛知県がんセンター 副総長 高橋 隆

「がんリスク評価センターの役割」

がんを発症された方の3-5%は、高率にがんになり易い体質を決める遺伝子の変化を生まれつき持っている遺伝性腫瘍です。今年度新設されたリスク評価センターは、がん発症の有無に関わらず、遺伝カウンセリングを通じて、ご家族の情報や遺伝性腫瘍の遺伝子検査(遺伝学的検査)から診断を行い、必要な方には院内診療科や他機関と連携して、最適な治療、検診による早期発見、予防を提案します。体質を知ることや血縁者への影響などに対する不安にも、遺伝カウンセリングでの支援を行います。本講座では、誰もが他人事ではない遺伝性腫瘍への取り組みをご紹介します。

中央病院 リスク評価センター センター長 井本 逸勢

「大腸がんのリスクと早期診断・治療」

大腸がんは、部位別がん罹患数、死亡数とともに第二位の身近ながんです。その多くは生活習慣や環境因子、加齢などにより、大腸粘膜やポリープに遺伝子変異が蓄積してできると考えられています。一方で大腸がんの数%には若い頃から大腸がんができる、複数できる、別の臓器にもがんができるなど傾向をもつ原因となる遺伝子が明らかな遺伝性の大腸がんがあります。それぞれがんになるリスクは異なりますが、早い段階でそのリスクを把握し、対応すれば大腸がんを予防することは可能です。当日は、大腸がんについてわかりやすく解説します。

中央病院 内視鏡部 部長 田近 正洋

「大腸がんの基礎研究から分かってきたこと
～発生・悪性化の仕組みと遺伝子の異常、そして治療～」

がん細胞は、元は正常だった細胞に複数の遺伝子の変異や発現異常が積み重なることにより発生します。現代医学は、それらの遺伝子異常がどのように細胞をがん化させるのかについて、多くのことを明らかにしてきました。また、がん細胞は生体内では単独では生存できず、免疫細胞、血管細胞などと折り合いをつけたり利用したりしながら共存していることも分かってきました。この講座では、私どもが研究対象としている大腸がんを例に、基礎研究によって解明されたこと、そこから臨床に橋渡しされ開発された新しい治療法、そして未来のがん治療戦略のために解明されるべき謎についてもご紹介します。

研究所 がん病態生理学分野 分野長 青木 正博